SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

用宗の海とその利用：レジャーを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 亮太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8072

用宗の海とその利用

～レジャーを中心に～

小林亮太

1　はじめに
2　用宗の海の歴史と変遷
3　海は誰のものか
4　海の利用のされ方
　4.1　浜行き
　4.2　用宗フィッシャリーナ
　4.3　釣り
　4.4　広野海岸公園
5　おわりに

1　はじめに

2014年現在、日本全国の地方都市では住民の高齢化や人口の流出といった現象が問題となっている。雇用の減少によって経済が縮小し、また若年層の人口が減ることで伝統文化の継承もままならないような状況があり、地方都市の活気がなくなってきている。このため、活気がなくなってしまったという事態を打破するために、多くの地方都市で様々な地域おこしの試みがなされている。私たちは今回、2014年6月8日から14日までの1週間で静岡県静岡市駿河区用宗（もちむね）地区を調査地として調査を進めたが、この地域も例外ではない。用宗ではまだまだ若い人口も多く、住民の高齢化もさほど進んでいない。しかし、確実に用宗の人口は年を追うごとに減少している。また用宗の住民のなかにも地域をどうにかして活気づけたいという意欲はあり、実際に「しらす祭り」や「なぎさ市」といったイベントも催されている。また、今後どのようにしたら地域が活性化するのかを用宗に存在する諸団体同士が話し合っている。

では、どのようにしたら用宗の活性化は図れるのだろうか。これには用宗独自の強みである、用宗の地域資源を有効活用していく必要性があるだろう。本稿では用宗の地域資源の1つに挙げることができる海についての、特にレジャーなどといった経済的な側面以外である遊びの部分について記述する[1]。用宗の海がどのような歴史的経緯で変わってきたの

[1] 経済的な側面である漁業については天野浩二の担当である第1章を参照されたい。また、用宗の強みは第9章の渡辺萌子も扱っているので、併せて参照されたい。

か、またどんな人々によって利用されてきたのかについて記述する。用宗の海の姿はどうなっていて、誰によって利用されているかについてまとめる。以上を踏まえた上で、どのようにしたら用宗の地域活性化は図れるのかについて検討する。

2　用宗の海の歴史と変遷

用宗は広い砂浜を伴った海岸に面している。そのため、古くから漁業など生業の場として利用されてきた。また、同時にレジャーの場としてや生活の場として、様々な人によって利用されてきた。今回のフィールドワーク調査では、幼いころ海で釣りをしたり、泳いだりして遊んだと語った人は多くいた。子供のころ大崩海岸を泳いで通過して、静岡県焼津市のほうまで行き、帰りは焼津から風に乗って流されるように用宗まで帰ってくる遊びをしていた人もいたそうだ。沖合まで流されてしまって、ちょうど通りかかった漁船に引き上げられて、漁港まで運んでもらったこともあるというから驚きだ[2]。

用宗の海岸は、かつては今よりも砂浜の幅が大きく、また現在よりも砂がさらさらとした砂浜だったという。静岡市によると、1950 年代（昭和 30 年代）より海岸線が浸食されている兆候が表れ始めたという。そのため、海岸線の浸食を抑えるために 1960（昭和 35）年から防潮堤の建設が始まった。しかし、防潮堤が建設された後も海岸線の浸食は年とともに進んでいった。1971（昭和 46）年から浸食の防止と海岸線の前進を図るために、沖合 50 メートルほどの場所に離岸堤の建設が始まった。離岸堤や防潮堤ができる以前では、台風がきたときなどは海面水位が上がり、海岸付近の家屋は浸水することもあった。加えて、現在の用宗漁港は 1956（昭和 31）年に建設が始まったが、用宗漁港ができる以前は上記のような防潮堤はなかった。そのため、漁の水揚げは、漁船から伝馬船を用いて漁獲物を浜へ運びあげることで水揚げされていた。また用宗の浜でも地引網が行われていた。浜へ水揚げされた漁獲物は、その場で荷捌きが行われていた。漁港がなかったため、漁船は砂浜に直接置かれており、船を屋内にしまうときは、浜よりすこし高いところの海岸付近に建てられた家まで引き上げていた。引き上げる際は、ウインチと船を結び人力でウインチを回すことで船を引き上げていた。

防潮堤や離岸堤は用宗海岸だけでなく、用宗海岸と漁港を挟んで東側に位置する広野海岸でも建設された。広野海岸でも砂浜の浸食がみられたため、砂浜を保護しそして積極的に広げていくためであった。しかし、広野海岸では思うような砂浜の前進は見られず、さらには台風によって引き起こされた高波によって防潮堤がたびたび被害を受けるような状態になってしまった。その結果、1988（昭和 63）年には広野海岸の埋立申請が許可された。広野海岸の砂浜は埋め立てられてしまい、現在は広野海岸公園となっている。広野海岸公

[2] 本節の記述はフィールドワークによる聞き取り調査と、以下の文献にもとづいている（静岡市農林水産部水産漁港課　1995; 静岡市役所経済局農林水産部水産漁港課　2006）。

園は、休日になると多くの家族連れでにぎわったり、犬の散歩をする人がいたり、多くの人の憩いの場となっている。

写真 1 用宗の海 青々とした水面が美しい（小林撮影）

用宗の開発の歴史は戦後までさかのぼることができる。葉山茂によると、太平洋戦争で荒廃した日本では、都市部での食糧不足を解消すべく、戦後の初期に漁業の復興に力を入れていった。アメリカの占領地政策によって漁場は沿岸から 12 海里までの範囲に制限されていたが、この範囲は現在では沿岸漁業で使う範囲である。日本の漁業は戦後、沿岸漁業から復興していった。また、戦争が終わったことによって地方の漁村に若者が戻ってきたことや、都市部での仕事がないために地方の漁村へ出稼ぎにやってきた人々が多くいた（葉山 2013: 27）。このように、戦後の間もないころの漁村はとても活気に満ちたものだった。

上記の現象とは少し違うかもしれないが、満洲から復員してきた人々が、新しい仕事や住居を見つけるまでの間、用宗にとどまっていたことがあったようだ。戦後の食糧需要の増大と沿岸漁業の復興にともなって、用宗でも 1953（昭和 28）年から漁船が直接水揚げできるよう桟橋の建設が始まったが、同年の台風によって全壊してしまった。これがきっかけとなって、1956（昭和 31）年から漁港の建設が始まった。用宗漁港の建設は掘り込み式とよばれる工法で建設された。このときに発生した土砂は現在の用宗漁港のすぐ北の場所、現在の用宗 1 丁目に廃棄された。漁港建設の工事が始まる以前は、用宗漁港のすぐ北の地帯は湿地帯になっており、そこで漁港建設の際にでた土砂を捨てることで現在のような住宅地にしたようだ。掘り込み式漁港の建設の際には、海底の土砂を地上に搬出する。なので、海底から運び出された土砂の中に何かいいものでもないか見物に来た人もいたようだ。

3　海は誰のものか

上記のように用宗の海は変遷してきた。海を主に利用してきたのは漁業者であったが、戦後の急速な経済復興以降、レジャーなどの漁業以外の面でも海は大いに利用されるようになった。そこで、本節では海は誰のものかについて、主に法制度や漁業権といった側面から記述する。

ここでは、金田禎之『漁業法のここが知りたい』(1994) をもとに、漁業に関する制度の変遷と現在の漁業法の特徴について記述する。江戸時代では、沿岸の海は地方の領主の領地であり、これに対して沖合の海は領地ではなかった。漁業はあくまで、村や漁業者が領主から沿岸の海で漁業を行う権利が与えられている状態であった。そして、権利を受けた村や漁業者は、一定の範囲の海で排他独占的に漁業を行うことができた。一定の範囲の海とは、村境を基点にして沖へ伸ばした線で区切った海であり、村に面したいわゆる「村の海」であることが多かった。そして、沖合の海は誰の海でもなく、自由に漁業をしてよい海だった。このように江戸時代では、漁業者側から見ると沿岸の海は自分たちが支配しているものであり、海を支配・所有するという考え方が発達した時期だった。明治時代に入り、明治政府は旧来の漁場占有利用権を打破し、すべての漁場を政府の管轄化に置こうとした。しかし、漁場を明治政府の管轄化に置こうとする政策は失敗した。漁場をめぐっての紛争が激化したためであり、江戸時代以来長い時間をかけて出来上がった慣習は明治政府でも打破することはできなかった。そのため、明治時代にできた漁業法は江戸時代からの慣習を踏襲したものになった。この法律は戦後の漁業制度改革まで存続した。戦後になり、改革が進むなかで江戸時代から長い間続いた権利関係もすべて白紙に戻った。では、現代の漁業権の性質とはどのようなものなのか。それは、特定の漁業を営む権利だということである。言いかえれば、海を支配あるいは占有する権利ではないということだ。海は土地のように所有できるものではなく、誰でも使用できるものだという考えが根底にはある（金田 1994)。

以上のように、簡潔に漁業制度の変遷と現代の漁業法についてまとめてみたが、現在の海の利用と、江戸時代以来の慣習からくる人々の意識との間にギャップを感じる。江戸時代以来の慣習では、村や漁業者の意識では海はまさしく自分たちのものであった。現代の漁業法では漁業を営む権利が付与されているだけだが、現代では海を積極的に利用しているのは漁業者だけではない。レジャーや観光の発達によって、漁業者以外の人々も積極的に海を利用するようになってきた。昔から海を利用してきた土地の人々からすればよそ者が入ってきたという感覚になるが、レジャー客からすれば海は誰のものでもない公用物である以上、自分たちも海を使えてしかるべきだという感覚になる。漁業者とレジャー客とが利用する時間や場所が異なっている場合は両者が交わらず、大きな問題は起こらずに済む場合が多い。両者の海を利用する時間帯や場所が重なる場合は、海は誰のものかという問題をめぐって対立が起こる場合がある。

4　海の利用のされ方

本節では、用宗の海がどのように利用されているかについて記述する。

4.1　浜行き

今よりも砂浜が広かった昭和20年代から昭和40年代ごろは、用宗の海岸では「浜行き」と呼ばれる行楽が盛んだった。用宗で生まれ育ったA氏（男性、50代）によると、多い時は浜に1000人ほどの人がいたという。どこから人がやってきたのかが不思議なほどだったと話す。またB氏（男性、70代）によると、4月から5月の春の季節は、花見などはせずに浜で遊んでいた。とても人が多く、場所取りなども行われるほどであったが、風が強いためブルーシートではなく縄を張って場所取りをした。雨の降っていない日曜日などはとてもたくさんの人がいたという。用宗以外からの人も多くいたが、用宗の住民も浜行きを楽しんでいたという。

この「浜行き」と呼ばれる行楽が盛んだった時期は、ちょうど高度経済成長期と同じ時期にあたる。安村克己によると、いわゆる先進諸国では、第二次世界大戦から立ち直り工業生産能力によって支えられた大量生産・大量消費を特徴とする大衆消費社会が出現した。日本でも1960年代ごろから大衆消費社会は出現し、これによって社会全体が経済的に豊かになった。そして、かつて富裕層に限られていたレジャーが大衆にも享受されるマス・ツーリズムの時代を迎えた（安村 2001）。また昭和30年代から昭和40年代はまだまだ乗用車の普及率も低かった。乗用車の統計が取られ始めたのは1961（昭和36）年からだったが、その時点でも世帯別の乗用車普及率は2.8パーセントと低いものだった（内閣府経済社会総合研究所 2013）。用宗海岸はJR用宗駅からもすぐ近く、当時はJR安倍川駅も存在していなかったためJR静岡駅から1駅という近さだった。上記のような理由から、静岡市に住む人々にとって用宗という地域は非常に身近なものだったことがうかがえる。

高度経済成長による観光の大衆化といった社会情勢や、都市近郊に位置しているという立地条件などの理由から浜行きという現象は生まれたのだと考えられる。用宗は日本の社会情勢の影響を強く受けてきたと言える。

現在ではかつての浜行きほどの盛況ぶりは用宗の海岸では見られなくなった。むしろ海岸よりも広野海岸公園の方が人は多く集まっている。だが、今でも小さな子供が波打ち際の消波ブロック（いわゆるテトラポット）の隙間でバケツを片手に生き物を捕まえている姿や、その近くで子供を見守っている親といった姿を見ることができる。その周りにはアウトドア用の組み立て式の椅子と日差しを遮るためのテントも設営されている。そのほかにも砂浜では家族や友人とバーベキューをする人や、特に何かをするわけでもなく海を眺めている人など、多くの人によって多様な使われ方がされている。

また、用宗の海は7月の中旬から8月の中旬までの約1ヶ月の間、海水浴場が開かれ多

くの人でにぎわう。主に小さい子供をつれた家族連れが多いが、若いカップルや友人同士のグループなどの姿も見られる。ここでも、日よけ用のテントやパラソルを立ててバーベキューをしたり、海で泳いだりして思い思いに楽しんでいる人々の姿を見ることができる。また、海開きの日にあわせて青空市という住民主体のイベントも開かれる。海岸では、ライフセーバーが巡回をしており、海開きの期間中はプレハブ小屋の本部が設置される。実際に、くらげに刺された子供をつれた親に対して処置の方法を指導する場面や、足場が不安定で滑ったら危険な消波ブロックの上にいる人に注意する場面などが見られた。このほかにも用宗町内会が運営する売店が設置されたり、海岸近く通りに面する店でかき氷が売られたりと夏の時期の海らしい風景になる。

4.2 用宗フィッシャリーナ

＜設立経緯＞

日本でも、収入の増加や余暇が増えたことによって、レジャーとして海洋レクリエーションの人気も高まっている。それに伴い、海洋レクリエーションで用いられるプレジャーボートの数も全国で増えていった。用宗もこの例に漏れず、プレジャーボートの数は増加していった。しかし、漁港内に違法係留されているプレジャーボートも増加してしまい、これが問題となった。この違法係留問題を解決するため、また一般市民にも利用できる海洋レクリエーション施設として、1991（平成 3）年から用宗フィッシャリーナの建設が始まり、2001（平成 13）年に完成した（静岡市）。また農林水産庁は、1994（平成 6）年に新マリノベーション構想を策定した。これは「わが国水産業の振興、漁村地域の活性化を図る」ものだったが、西駿河湾中央地域として焼津とともに用宗もこの構想のモデル地域に選ばれた。この構想に用宗も組み込まれたため、用宗フィッシャリーナの建設はますます推進された（農林水産庁 1995）。用宗フィッシャリーナは静岡県内や焼津や島田などの静岡近辺の人々や団体によって主に利用者されている。清水や富士にも係留施設があり、静岡市近辺でもっとも規模が大きい（保管数などが多い）のは清水にあるマリーナである。しかし、用宗フィッシャリーナは大型のボートが係留できるようになっているため、用宗近郊の人々や団体のみならず静岡県の各地に利用者がいる。

＜フィッシャリーナをめぐる見解＞

では、現在用宗フィッシャリーナはどのように利用されているのだろうか。このことについて用宗フィッシャリーナの職員であるＣ氏（男性、50 代）に話をうかがった。

現在、用宗フィッシャリーナでは、漁業者側とマリンレジャー側との間に深刻な問題は起こっていないという。船が近くを横切って引き波を立てた、などの小さなトラブルはあるようだが、漁船の網をひっかけたといったような深刻な問題はないようだ。目立った問題が起こっていない理由として、お互いの海を利用する時間や場所が違うという理由があげられる。用宗の多くの漁船はシラス漁船である。シラス漁船は沿岸で活動しているが、

プレジャーボートは比較的沖合に出ていくため、活動場所が異なっている。漁港と用宗フィッシャリーナが隣接しているため、沖に出ていくためには漁船の近くを通らなければならない。両者とも午前中に出航するため、このときは時間が重なってしまう。プレジャーボートは主に夕方に帰ってくるのに対し、シラス漁船は午前中に漁を終え漁港に戻ってくるため、時間帯は異なっている。また、プレジャーボートの利用は土日やお盆に多いが、シラス漁は日曜日が休みになっており、シーズンや捕れ具合によっては土曜日も休みになる。

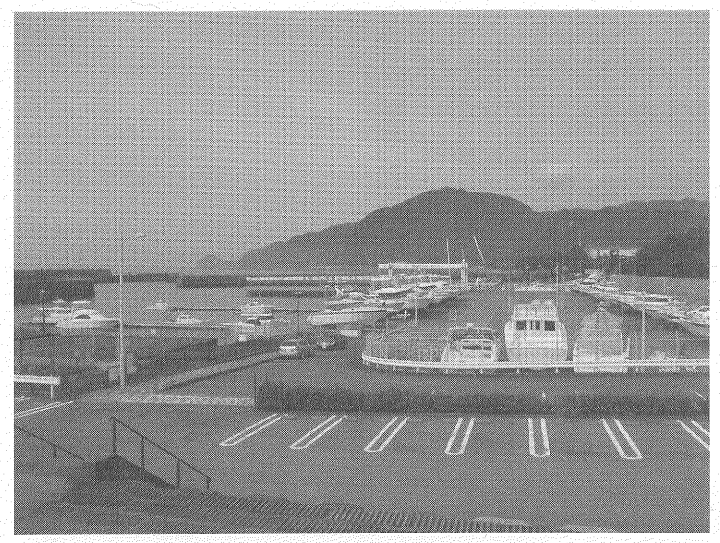

写真 2 用宗フィッシャリーナ 大型の船が多数保管されている（小林撮影）

用宗フィッシャリーナの業務は市から清水漁業協同組合に委託されており、同じ清水漁業協同組合である用宗支所の職員とは 1 週間に一度ほど情報交換をしている。プレジャーボートが陸での所用のために一時的に入港するときなどは、フィッシャリーナから漁協へ事前に連絡し相談をするそうだ。

また、用宗で漁業を営む D 氏（男性、50 代）に、マリンレジャー客についての印象について話をうかがった。

マリンレジャー客については、マナーが悪いと感じることや、漁船の近くを横切る行為に危険を感じることも多いようだ。一方、「今は漁業とマリンレジャーとの共存共栄の時代なので、こっちは商売だからと言っていられる時代ではなくなった」とも話す。レジャー客との間に事故はおこさないように配慮をしているそうだが、共存共栄といった理由のほかにも、「事故を起こすと大きい船のほうがどうしても悪くなってしまう」という理由もあるそうだ。また、清水のほうが漁業とマリンレジャーの間にある問題は深刻だと話した。

用宗でセーリングカヌーという小型の船でマリンスポーツを楽しんでいた E 氏（男性、

60代）にも話をうかがった。

実際にマリンレジャーを楽しんでいて、漁船の存在を危険に感じることも少なくないと話す。漁師は基本的にレジャー客を邪魔に思っており、海に出てくる危険な人たちくらいに認識している場合もあるという。用宗以外の事例だが、漁船がわざとレジャーボートの近くを横切ったりすることもあると話す。レジャー側も楽しく遊びたいため、こういったことが起こらないよう漁船にはあまり近づくことはない。海は誰のものでもない以上、レジャー側にも楽しむ権利はあり、今後はスポーツと漁業とがどのように棲み分けていくかが課題であると話す。またこういったことは、規則や行政による規制などで決めていくのではなく、お互いが配慮しあっていかなければならないと語った。マリンレジャーと漁業とは対立している場合が多い。用宗ではあまり見受けられないが、その理由として用宗が田舎であるためではないかと話した。

現在、漁業者側とマリンレジャー側との話し合いの場などはないようだ。今まで目立った問題や事故が起こってこなかったため、話し合いの場を設ける必要がなかったのだと考えられる。現在のマリンレジャーと漁業の両者の棲み分けがされている状況は、シラス漁を主とする用宗の漁業の特徴とマリンレジャーの特徴がうまく噛み合って成り立っている。また、用宗フィッシャリーナ職員が漁業協同組合員という事実も大きく関係していると考えられる。しかし、この棲み分けは微妙なバランスの上に成り立っているものであり、どちらか一方の特徴が変わったとき容易に崩れる可能性があると言える。

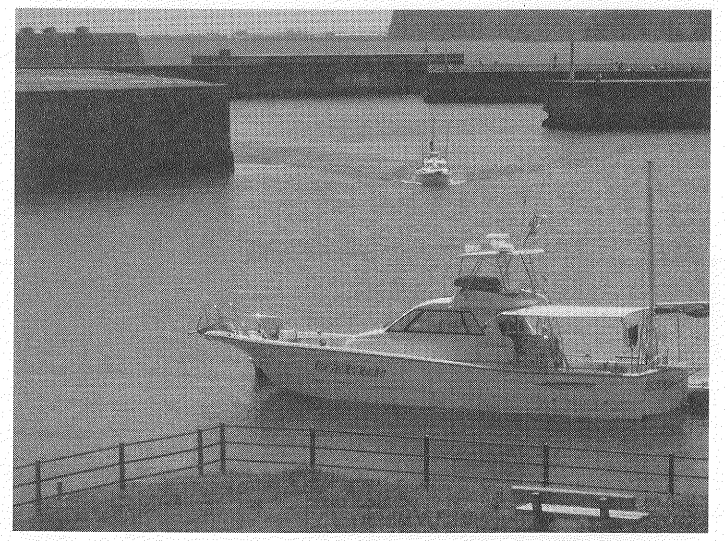

写真3 プレジャーボート 波を切りながらすすむ（小林撮影）

4.3 釣り

用宗周辺の海では釣りを楽しむ人の姿が見られる。波打ち際や消波ブロックの上、また

広野海岸公園の防波堤から海側へ 1 段下がった場所にある歩道など釣りを楽しむ場所は様々である。なかでも用宗漁港からのびるように建設された西防波堤には多くの釣り人が集まっている。ここで釣りを楽しむ E 氏（男性、40 代）に話をうかがった。

今日、E 氏は静岡県磐田市から用宗へとやってきた。アジやクロダイなどが良く釣れるようだが、今日はアジが狙いだそうだ。このほかにもタチウオ、コハダ、カサゴ、メジナなども釣ることができる。多くの港では、防波堤が立ち入り禁止になっている場合が多い。しかしこの用宗漁港では立ち入りは禁止されておらず、誰でも入ることができるのがいいところだと話す。そして防波堤のすぐ近くに駐車場もあり、トイレも設置されている。また魚臭くなく、清潔感もあるところも良い。

用宗側も釣り人が来るのを歓迎しているのではないかと話した。上記のような理由のほかにも、防波堤の上から向かい側の防波堤を見ると、MOCHIMUNE とアルファベットで書かれた文字やきれいにペイントされた絵がちょうど見えるようになっているためだ。また E 氏は、用宗はどちらかというと魚が釣れるほうだと思っているため、釣り場としての印象は何となくだがいいところだと話した。また、用宗は週末の休日になると家族連れで釣りをしている人が多いそうだ。釣りや海水浴をしたりするのだったら、清水や三保のほうに行ったりするので、用宗は地味なイメージだとも話した。

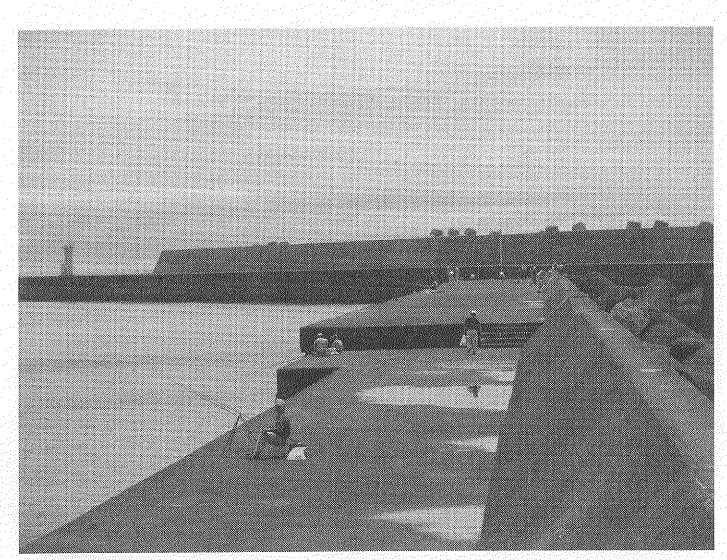

写真 4 釣り人 週末になると多くの人でにぎわう（小林撮影）

4.4 広野海岸公園

広野海岸公園は広野の埋め立て地にできた公園で、様々な人々によって利用されている。

公園の防波堤の上は歩道になっており、平日でも朝や夕方になれば散歩をする人などがよく見られる。また、犬の散歩をする人の姿もよく見られる。広野海岸公園は東西にのびており、その長さは 800 メートルほどになっている。私もこの公園を何度か歩いたが、天気がよい日に海を見ながら浴びる潮風はたいへん気持ちが良く、また公園の長さが散歩にはちょうどよく感じた。

この公園の両端には広い駐車場が整備されている。週末には公園に訪れる家族の車でいっぱいになり、駐車しきれない車もあるほどだが、平日の昼間には企業の営業車がよく止まっており営業の途中に休憩している姿が見られる。また用宗駅から公園まで歩いて 20 分ほどで来ることができるほか、静岡駅からのバス路線もあるため交通アクセスが良い。

週末になると小さい子供を連れた家族で公園はにぎわう。公園の芝生の上にビニールシートを敷いている家族や、小さいテントを立てている家族の姿も見られる。特に公園の中央にある沈没船をモチーフにした遊具は子どもに人気で、多くの人が遊んでいる。また沈没船のすぐ近くには人口の池がある。調査した期間が夏だったこともあり、水着になって水で遊ぶ子どもは多かった。周りは砂場のように細かい砂が敷き詰められているため、裸足になっている子どももいた。

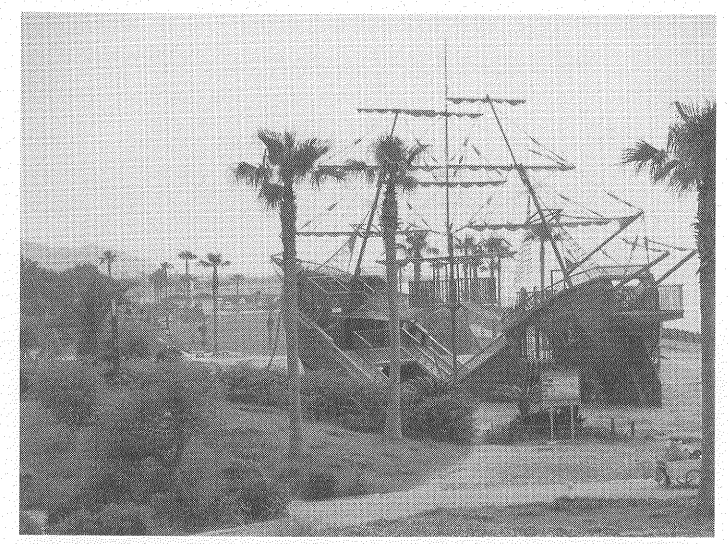

写真 5 広野海岸公園 公園中央の沈没船がたいへん人気（小林撮影）

5 おわりに

今回の調査では、用宗に住む人々が、用宗のことを「静かなところ」「何もない」「発展のしようがない」といった“ネガティブ”なイメージを持っていることに驚いた。本当に

用宗は何もない静かな場所なのだろうか。確かに大々的に観光地化された海を持つ地域と比べれば静かかもしれない。しかし、実際には休日にたいへん多くの人が海を目当てに用宗へ訪れているし、しらす祭りやなぎさ市など様々なイベントが催されている。これは現状でも活気があるといえるし、用宗には何もないとは言えないだろう。

ここまでレジャーなどの遊びの面に注目して用宗の海の利用についてまとめてきた。用宗付近の住民はもちろんだが、用宗以外の人からも大いに利用されていることが分かった。海岸近くの遊歩道や道路などでは朝夕に散歩する人の姿がよく見られる。また、砂浜や広野海岸公園には週末の休日になると、とても多くの人でにぎわう。これは用宗が静岡市などの都市部から近いことや、幹線道路が近くを通過しているなどのアクセス面の良さによるものだと考えられる。また用宗の海の特徴として、主な利用者は子供連れや家族客などが多くを占めることがあげられる。普段は若者やカップルの姿というものはあまり見られない。海水浴のときなどは見られるが、あまり多くなく騒ぎ立てるようなこともない。実際、海の周辺施設も派手なものはなく落ち着いたものや子供向けのものが多い。こういったことが4節3項でE氏が話したような「地味なイメージ」や上記のような「何もない」といった言葉に繋がっているのだろう。

こういったことは何もマイナスの要素ではない。一般に地域おこしといえば、地域社会を大々的に観光地化し、外部から人をたくさん呼び寄せるといったことや、地域の自然からくる特産品を考案し売り出すといった派手なイメージが持たれがちである。しかし、用宗にはすでに落ち着いた家族向けの海という利用がなされている。これをわざわざ変えていくより、家族向けという実態を利用して地域おこしを目指していくことが重要ではないだろうか。

ここで重要なのは、用宗の住民の意思や、住みやすさといったものに反しないことだろう。鳥越皓之はその著書の中で景観について「生活のにじみ出てきたものが景観である(中略)観光客が喜ぶからと、そこの生活とは関係ないクジャクを飼育したり、よそでもやっているからと安易にコスモス畑を増やしたりというのでは、知恵のない話である」と述べている（鳥越 2009: 21)。地域の生活に密着した土地の利用でなければ、長期的な住民の利益にはならない。新しく施設を作るにしても、計画の段階から地域の人々が関与してできたものであれば、その施設は地域の生活に根ざしたものになる。その案を実現するために地域組織の再編成、共同意識の芽生えなど、非経済的な部分でも地域活性化につながるとしている（鳥越 2009)。

今回の調査で感じたことは、必ずしも用宗の人々全員が地域おこしを願っていないことである。現在の静かな用宗を気に入っており、外部からあまり人が来なくていいと考えている人もいれば、最初から用宗の活性化は無理だと考えている人もいた。「商売をするのだったら多くの人に訪れてほしいが、商売をしないのだったらあまり来てほしくない」と話す用宗の方の言葉が印象的だった。もちろん地域を活性化していくことも大切だろう。今いる住民の住みよさといったことも考慮していかなくてはならない。現在、用宗は子供連

れの家族向けの海としておだやかに利用されている。この利用のされ方を維持しつつ、良いところは残しながら発展を目指すことが重要だ。無理に地域おこしをしていくのではなく、地域の良さを生かし地域の実情にあった地域おこしを目指していくことが重要だと考える。

謝辞

本調査にかかわったすべての人に対し、感謝いたします。

参照文献

安村克己

2001　「観光の歴史」岡本伸之編『観光学入門――ポスト・マス・ツーリズムの観光学』有斐閣アルマ、31-56。

金田禎之

1994　『漁業法のここが知りたい』成山堂。

静岡市農林水産部水産漁港課

1995　『用宗漁港』静岡市農林水産部水産漁港課。

静岡市役所経済局農林水産部水産漁港課

2006　『用宗漁港 50 年の歩み』静岡市役所経済局農林水産部水産漁港課。

鳥越皓之

2009　「景観論と景観政策」鳥越皓之・家中茂・藤村美穂著『景観形成と地域コミュニティ――地域資本を増やす景観政策』農村漁村文化協会。

内閣府経済社会総合研究所

2013　「主要耐久消費財等の普及率（一般世帯）」内閣府ホームページ（2014 年 7 月 20 日取得、http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/2014/201403fukyuritsu.xls）

農林水産庁

1995　『新マリノベーション構想関係資料集』水産庁。

葉山茂

2013　『現代日本漁業史――海と共に生きる人々の七十年』昭和堂。